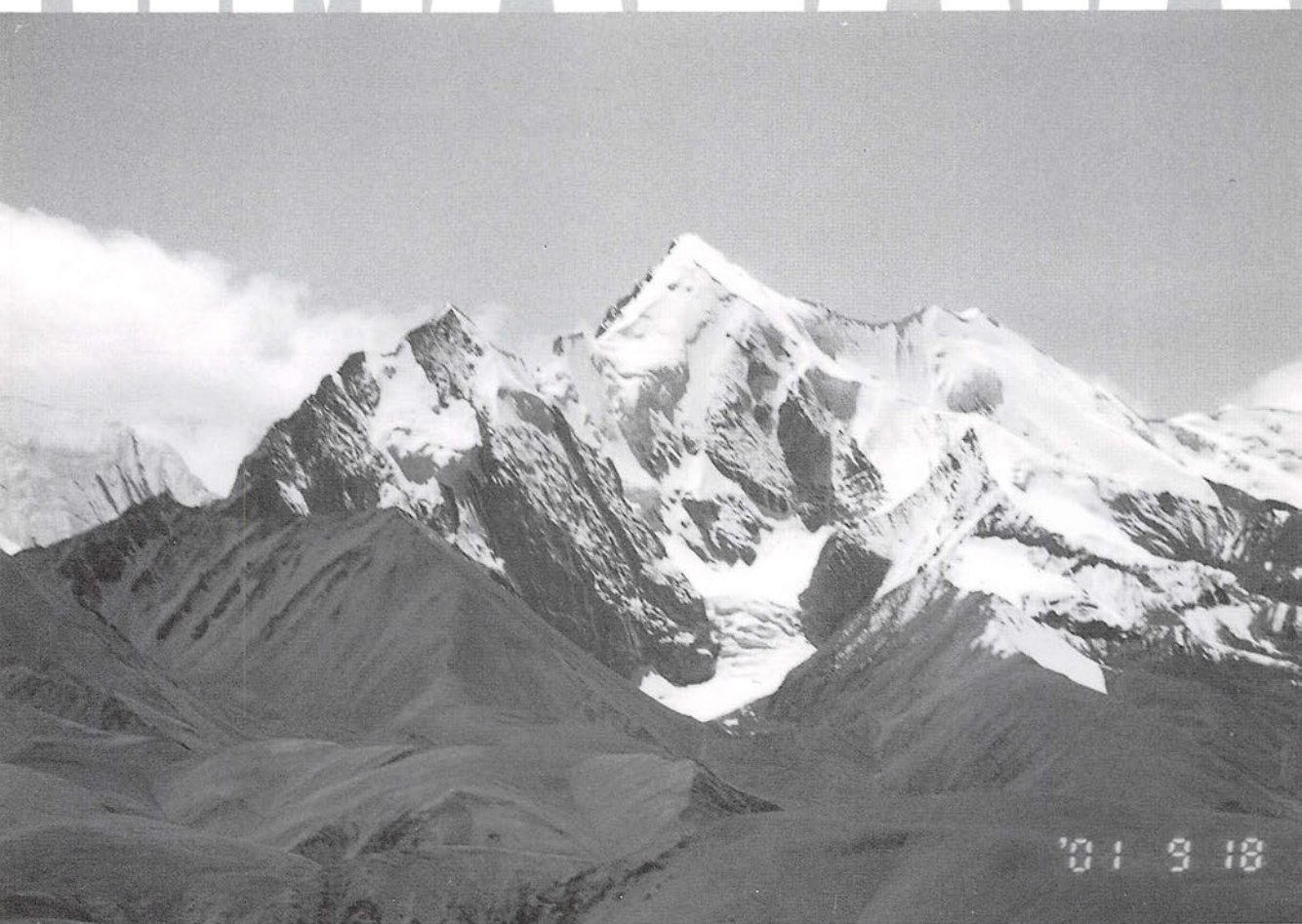


ヒマラヤ

No.389



2004 APR



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

平成16年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成16年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。（委任状は、添付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。）5月13日までに必着するようお願いいたします。

記

1. 日時 平成16年5月15日(土)午後1時～2時
2. 場所 東京都豊島区東池袋4-7-7
かんぽヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分
地下鉄有楽町線東池袋（出口A2）
から徒歩2分

3. 議事

- (1) 議案第1号 平成15年度事業報告について
- (2) 議案第2号 平成15年度収支決算について
- (3) 議案第3号 平成16年度事業計画について
- (4) 議案第4号 平成16年度収支予算について

4. その他

ニンチン・カンサ トレッキング説明会

総会終了後、午後2時30分から同じ会場にて、今夏実施のトレッキング（P21参照）の説明会を開催します。参加を希望される方は、「総会出欠ハガキ」に「説明会希望」と明示して下さい。

表紙写真

ハインリヒ・ハラーとアウフシュナイターは、4ヶ月以上も滞在したトラデューンの村を離れて1944年クリスマス・イヴの日に現在の吉隆県に到着した。その背後に聳えていたのが、土地の人間が「チョグラ・リ（6,514m）」と呼ぶ秀峰であった。

（文と写真：山森 欣一）

ヒマラヤ No. 389

- | | |
|----------------------------------|-------------------|
| 1. PEOPLE | サティヤバラータ(サティヤ)・ダム |
| 2. 第1回『新日本ヒマラヤ会議・東京』報告 | |
| 10. 中国、四川省・邛崃山系の岩峰登攀 | |
| 14. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉 | |
| 15. ロー・マントンの空、遥かなり(19) | 高橋 照 |
| 21. HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集 | |
| 22. [連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑(5) | |
| 24. 事務局日誌 | |

インド洋のヒマラヤニスト

今春インド海軍チョモランマ北西壁隊を隊長として率いるサティア氏は、2002年に日印合同東部カラコルム登山隊で登山をした縁で、(社)日本山岳会の招きで来日、1月25日H A J主催の新ヒマラヤ会議で豊富なスライドを用いてインド・ヒマラヤの魅力を紹介した。

氏のヒマラヤ登山は1979年コラホイⅡ峰(5,050m)から始まっている。当時14歳。翌年、ダージリンの登山学校(HMI)のアドヴェンチャーコースを修了。その後も毎年トレッキングと登山でインド各地を訪れ、ネパール、アンナプルナー周やランタン谷にも足を延ばしている。

1997年にはHMIのベーシックコース、98年にはアドヴァンスコースを修了しており、このあたりからは登山も本格化、2000年にはリモIVにフランスとの合同で登山、翌年にはH・カップパデアとC・ボニントンが合同で挑んだ東部カラコルムのアラガングラス登山隊に参加している。そして2002年がJACとのパドマナブとなっている。

こうした外国人との登山は彼の登山意識を変えたのだろうか。昨年春にはカメット(7,756m)とアビ・ガミン(7,354m)に隊長として挑み、両峰に登頂。夏にはサセール・カンリⅠ峰(7,672m)とⅣ峰(7,364m)にやはり隊を率いて挑んでⅣ峰に登頂している。チョモランマ北西壁に向けて現在最も油がのっている観がある。大量のスライドを持参したが整理が不十分なところは、勢いで話を続けていた。

海軍では潜水艦に乗艦しているとの事だが、「パンゴン湖にでも浮かべたのか!」と思うぐらいに山に登っており、ヒマラヤ各地を回っている事がうかがえた。パンゴン湖のスライドも多数あった!

インド海軍では、過去にM・S・コーリー氏の様に個人的に登山をしていた例はあったが、正式にインド海軍の登山隊として組織された隊を率いてカメット、サセールカンリは登山している。また、



これまでにアフリカやニュージーランド、コーカサスやウラル、英国そしてヨーロッパ・アルプスでも登山をしたことがあるという。

肩書きとはうらはらに身長165センチくらい、痩せており、スリムな2枚目。とても若く見える優男である。潜水艦の司令官にして、登山家、また多くのウォータースポーツのインド代表としても世界で活躍。犯罪小説の作家としての一面もあるという。多才の一言では言い表せない、現在インドを生きる才気に溢れた青年の姿があるように思えた。未だ花嫁募集中との事。そりゃそうだろう……。

彼を見ているとインドのお国柄が羨ましくなってくる。登山、冒険への理解の深さは、ちょっと信じがたいものがある。サティア氏が今回、38歳という若さで海軍という看板を背負って世界最高峰の北西壁に挑む事は、我々の想像を絶する苦労と、プレッシャーがあるのではないかと想像する。吉報を期待したい。(記:中川 裕)

第1回『新日本ヒマラヤ会議・東京』報告

H A J 啓蒙会議の変遷

日本ヒマラヤ協会（H A J）は、1976年4月にそれまでの日本ヒマラヤ山岳協会（H A A J）を改称したのであるが、改称の意図とは逆にその後の活動の中心は「山岳」が中心となった。

1) 東北地区ヒマラヤ研究会

そのH A Jは改称前の1971年6月に宮城県仙台市で「東北地区ヒマラヤ研究会」を開催した。この研究会の目的は、当時ネパール・ヒマラヤが再オープンしたことを受けて、熱心なヒマラヤ登山志向者が数多く居住する「東北地区」で啓蒙活動を展開することにあった。

東北地区ヒマラヤ研究会は東北6県を順に開催地として開かれ、岩手（盛岡）、山形（天童）、福島（飯坂温泉）、青森（八戸）、栃木（宇都宮）、秋田（秋田）、岩手（沢内村）の8回開催され、8年間で延べ571名が参加した。

2) 日本ヒマラヤ会議

東北地区ヒマラヤ研究会が東北地区を一巡する頃になると、1974年カラコルム、1975年ガルワール、カシミールの解禁などにより、ヒマラヤ登山情報のニーズは全国的な広がりを見せて来た。この要請に答えるため、地方的な性格を持った「東北地区ヒマラヤ研究会」を発展的に解消し、「日本ヒマラヤ会議」を全国的に展開し啓蒙活動を行うことになった。

その第1回は、1979年12月山形市で開催され、



▲ブータン・ヒマラヤ研究会

以後、京都（2）、札幌（3）、仙台（3）、高知（3）、長野、秋田、前橋、福岡、宇都宮などで開催され4年間で延べ681名が参加した。

3) インド・ヒマラヤ会議

一方、1980年にガンゴトリが解禁されると、時代の背景もあり、一気にインド登山ブームが到来した。インドは大国であり許可取得やビザ取得、別送品手続きなど登山隊には複雑な事務処理の知識が必要であった。

この要請に応じて1980年3月にインド・ヒマラヤだけに限定した会議をスタートさせた。翌年からはビザの取得を視野に入れて毎年1月に開催され、昨年まで24回継続して開催し、延べ1,011名が参加した。

4) 中国登山研究会

中国のヒマラヤ登山は1980年から開始されたが、H A Jが中国ヒマラヤに初めて入山したのは1983年であった。その年、中国登山協会の代表団を日本の5団体（日山協、J A C、H A J、女子登攀クラブ、日中文化交流協会）が招請した折りに、H A Jでは東京と札幌の二か所で研究会を開催、又、1986年3月に四川省登山協会、11月にチベット登山協会の代表団をH A J独自で招請し、東京で研究会を開催した。1997年からは東京で「中国登山研究会」を継続して開催し、延べ452名が参加した。

5) その他の地域研究会



▲インド・ヒマラヤ会議

▼中国登山研究会



ネパール・ヒマラヤ研究会を1979年8月に東京、仙台、福岡、大阪、札幌で、84年7月に東京、仙台で開催し、延べ261名が参加した。

カラコルム研究会を1984年2月に東京、京都で開催し、延べ70名が参加した。

ブータン・ヒマラヤ研究会を1983年2月と3月に東京、名古屋、札幌で開催し、延べ81名が参加した。

6) 高所登山「事故と環境対策研修会」

日本のヒマラヤ登山遭難事故は1968年から連続して発生している。H A Jでは部外の多くの研究会・研修会に資料を提供して、遭難事故防止の啓蒙活動を行ってきたが、折から立ち上げに協力したH A T-Jのテイクイン、テイクアウト運動の定着をも視野に入れて、1994年から「高所登山事故と環境対策研修会」開催し、2001年までの8回で延べ388名が参加した。

新日本ヒマラヤ会議の発足の背景

前述したようにH A Jではヒマラヤ登山界のニー



▲パサー事故報告の酒井隊長(左)

▼中村保氏(左)とサティア・ダム氏(右)



ズに応えるべく、時代時代によって様々な研究会・研修会を開催し、ヒマラヤ登山の啓蒙活動を展開して来た。

ところが、登山者を受け入れる国々の規制緩和やI T化が進んだこともあって、人気のある山ではかつてとは異なる登山形式(私はそれを「高所遠足」と呼んでいる)が定着しつつあり、それに伴い現地の登山基地では登山装備・食糧の調達も容易になった。

登山申請も相手国の担当部署のH Pから取り出すことが可能になり、別送品を持ち込まなくても登山できる程度の山と人数の隊が多くなった。そのためこの数年、研究会・研修会に参加する人は激減していた。

H A Jではインドや中国の地域研究会と事故・環境対策の研修会をなんとか継続したいと模索したが、それぞれを独自に開催することが参加者の数の上から限界となった。

しかし、手続きが簡便化されても、それで登山者が利益を得るのは『B C』までである。その上



▲インド情勢を語る森田千里氏

▼新日本ヒマラヤ会議・東京会場風景



の登山活動では、事故を起こさないための啓蒙が必要なのは今も昔も変わらない。むしろ、地球の温暖化などの要因が、かつての記録を鵜呑みにする怖さを教えており、高所の順応や雪崩やクレバスに対する啓蒙活動は一層必要になったと感じられる。

HAJでは、このような観点から3つの研究・研修会を発展的に解消し、これらをも統合した内容に衣替えした「新日本ヒマラヤ会議」を発足させたのである。

第1回会議の報告

日時：2004年1月30日（日）9:00～17:00

場所：労働スクエア東京（東京、八丁堀）

中川裕常務理事が司会を担当。冒頭、酒井國光会長から開会の挨拶があった。

9:15～9:50 [中国ヒマラヤ未知の山々を探る]

HAJ山森欣一理事長がスライドを駆使して、中国領ヒマラヤの未知の山を西の新彊から青海、雲南、四川、チベットと順に紹介した。

10:00～12:00「インド・ヒマラヤの魅力」

日本山岳会が招請した、インド海軍のダム氏（People参照）が初めにインド・ヒマラヤの概念、登山料などを紹介、特にインナーラインを図上で示して解説した。その後スライドによってインドの山々を紹介したが、地域が入り乱れるなど多少わかりづらいこともあったようだ。

12:00～13:00 昼食

午後は司会を睦好正治常務理事に交替。

13:00～14:00「クレバス転落事故例の研究」

HAJ中川裕常務理事がパソコンを駆使して、

▼サティア・ダム氏(左)・と酒井國光会長(右)



クレバス転落のケースについて解説した。日本人の転落死亡は別表のとおりであるが、①ヒドン・クレバスへの転落8、②開いているクレバスへの転落2となっている。

①については、転落しても助かるためには、アンザイレンするのが原則だが、その原則がなぜ守られないのか？ その要因にはアンザイレンの煩わしさがあり、パートナーとの歩くスピードの違いも上げられる。また、アンザイレンを解いた時の事故の原因には、ちょっとトイレ！やちょっと写真を！などのほか、ラッセルを交代するために外した！などもある。

アンザイレンしないまま転落したが、小柄な女性で転落したら両端から柵が出ていて、本人はその柵の間からさらに落下、背負っていたザックがその柵に残り、その柵を崩せなくて救出できなかったとの報告もある。

②については、開いてるクレバスを飛び越えるために弾みをつけようと背中を押してもらうために二人がクレバスの縁に集まったため、その重みで縁が崩れて転落したのが1976年。アンザイレンして下降中にクレバスの狭まった箇所を探している最中に縁を踏み抜いて転落し、パートナーが止める前に雪の隙間に嵌まって止まったのが2003年。

いずれにしても貴重な事例を知らずに同じような事故を起こしていることが分かる。

14:00～14:50「テイクイン、テイクアウト」

HAJ山森理事長が、チョコレート、カロリー・メイト、カップ・ラーメン、飴などの現物を手にとりながら、テイクインの基本を解説。テイクアウトについては現地の生活習慣、風習などに配慮

しながら実践すること、トイレの処理についてはBC地の特徴により様々な方法があることなどを体験に基づいて解説した。

15:00～16:00 「バスター峰登山と事故の記録」

H A Jの酒井隊長から登山の様子がスライドで報告され、上部登攀については石川龍彦隊員が報告した。その後、酒井隊長からスライドで事故のクレバスの様子が報告され、遺体の収容の様態も報告された。その後、事故原因について酒井隊長が途中経過として転落の状況について図説した。

16:00～16:15 「インド最新情報」

労山前会長でマナリ在住の森田千里氏が帰国した足で会場に駆けつけられ、飛び入りで最近のインド情報について紹介された。

16:15～16:55 「ネパール登山規則の変遷と現状」

H A J尾形好雄常務理事が、昨年大改正されたネパール登山規則について、登山規則の歴史的な経過を解説した。

16:55 山森理事長から閉会の挨拶があり第1回の新日本ヒマラヤ会議は終了した。

『参加者』（インド）サティア・ダム

（北海道）松山昭、（岩手）大江洋文、（福島）佐藤邦彦、（群馬）八木原罔明、（栃木）糸川章、（茨城）酒井國光、（埼玉）堅田秀子、笹原芳樹、中岡久、寺沢玲子、飛田和夫、森田千里、小沢直宏、加藤富之、（千葉）江尻健二、竹花晃、加藤孝子、宮崎久夫、山本泉、（東京）中村保、山森欣一、尾形好雄、中川裕、睦好正治、坂上眞知子、

澤田幸子、丸山博司、藤本慶光、北条治男、富澤征子、柳穰、佐藤修史、出口當、菅原愛里、及川美奈子、大神田伊曾美、坂井広志、尾崎元紀、森山安次、大蔵喜福、中野栄次、岩崎文子、永田秀樹、江本嘉伸、松田雄一、山森美智子、（神奈川）長谷川和雄、緑川広、吉武裕志、難波治雄、中島徹夫、石井修一、小松由佳、小島拓、青木達哉、揚田正太郎、平野裕祐、猿橋秀隆、野村智志、古関正雄、（山梨）青木茂、（静岡）出利葉義次、吉田裕之、大島素太郎、（長野）西田均、林原隆二、（愛知）田辺治、鈴木常夫、水野起己、（奈良）石川龍彦、（愛媛）青木洋、細川和子、（パキスタン）大住恵子（以上74名）

『その他特記事項』

今回、新会議発足に当たり、日本山岳会が招請されたインド海軍のサティア・ダム氏の講演に際しては、コーディネーターの立場から中村保氏に全面的にご協力を戴き、サティア氏が参加されたJ A Cの東カラコルム登山隊の関係から坂井広志にもご協力を戴いた。

また、新会議ということもあり、大きな会場を確保したこともあって、この機会に若い登山者に門戸を開くべく、高体連登山部の事務局のご協力を得て、東京・埼玉・千葉・神奈川の所属する高校218校に対して「参加費無料・テレカ付き」の案内を行ったが、応募者は1名で当日その応募者も欠席された。早い時期の案内であったが、残念な結果に終わった。

日本隊のクレバス転落事故例

（注）国名のP＝パキスタン、I＝インド、C＝中国

2003.11.30 山森欣一作成

	事故発生日	山名	標高	国	派遣母体名	隊長名	数
1	1968. 8.23	南アトラック・ゾム	6,241	P	札幌医科大学	松浦正司	4
8月22日に松浦、西尾、中村の3名が初登頂に成功しC 2 (5,700m)まで下山。翌日、村田俊雄(32)を含めた全員でC 1 (4,800m)へ下山中、村田が滑落しクレバスに転落。24日現場で看護。25日は5,200mでキャンプ。27日BC帰着。9月1日、チトラルで村田が死亡した。							

	事故発生日	山 名	標高	国	派遣母体名	隊長名	数
2	1976. 5.27	ガッシャーブルムⅡ	8,035	P	登攀倶楽部岐阜	青木 寿	13
5月26日、氷河上のC 2下で二人がヒドン・クレバスを踏み抜いた。翌日、その口が開いたクレバスを宮本武敏(29)が反動をつけて向こう側へ飛び越えるため、平松義範(26)に背中を押すように言った。そのためクレバスの口付近に二人が同時に乗ったため、雪のブロックが崩壊して二人はクレバスに転落した。一人の重量には耐えていた雪が二人乗ったため崩壊したのである。アンザイレンはしていなかった。『ガッシャーブルムⅡ 追悼報告書』							
3	1978. 8. 2	ガッシャーブルムⅤ	6,970	P	碧稜山岳会	馬場口隆一	12
Ⅴ峰の東峰に8月2日、登頂した隊員が、先に着いている筈の馬場口隊長(30)の姿が見えないので探すと、頂上直下のクレバスに転落死亡していた。							
4	1980. 8. 6	ピラフォンド・ラ	5,500	P	神戸大学	右田 卓	2
8月6日、リモ山群偵察のため行動中、右田卓(25)がピラフォンド・ラ(5,500m)でクレバスに18m転落して死亡した。							
5	1981. 6.10	ボゴダ	5,445	C	京都山岳会	中井 巖	18
支援隊員として参加していた白水ミツ子(30)が、6月10日、C 1(4,000m)から三人でB Cへ下山中、トップで氷河上を歩いていて11時20分クレバスに転落。8m下にザックだけがあり本人は更にそこから10m下に落ちた。呼ぶ声に応答していたが「私ここで死ぬから、もおいしいよー」との声を残した。収容はできなかった。アンザイレンはしていない。『中国・天山山脈 処女峰 ボゴダ』							
6	1981. 8.10	デュルン・デュルン	5,170	I	学習院大学	香椎 正純	2
デュルン・デュルン氷河を偵察していた香椎(20)が、14時45分頃5,170m地点でヒドン・クレバスに転落。アンザイレンしていた成沢隊員が引き上げようとするができず、15時30分救援を求めるため下山。遺体は18日、レスキュー隊によってクレバスから引き上げられた。							
7	1986. 6.25	チリン東峰	7,090	P	横浜山岳会	重谷 務	10
6月25日、C 2(5,560m)からB Cへ下山中の神田久雄(29)が、C 1下で氷河からモレーンに移動し行動中クレバスに転落した。神田は「水がある。背が立たない」と応答したが、隊員が9m下まで降りると、そこには水がありザックが浮いていたが神田は見付からなかった。結局行方不明となった。アンザイレンはしていなかった。『CHRING 7090』							
8	1992.8. 20	ヤズギル・ドームS	7,440	P	東京電機大学	松本 政英	5
8月20日、C 2(5,900m)に固定ロープを伝って移動中、16時50分頃固定ロープが無い箇所では八木沢和彦(21)がクレバスに転落。クレバス内の25m下で遺体を発見したが収容は出来なかった。『カラコルム登山隊 92 報告書 八木沢和彦君追悼』							
9	1993.10.18	トゥインズ	7,350	I	明治学院大学	伊丹 紹泰	13
10月18日、アタックのためC 5(6,700m)を4時40分に出発。ヒドン・クレバスが予想されるのでトップとセカンドがアンザイレンし、残る5名はノーザイルで登高中、7時15分、それまでアンザイレンしていた佐藤正倫(29)が7,000m地点でトップを交替するためにノーザイルになり、クレバスに30m転落。隊員がクレバス内で死亡を確認。収容は出来なかった。『ザイル 明治学院大学山岳部50周年記念号』							
10	2003. 8.21	バサー	7,478	P	日本ヒマラヤ協会	酒井 國光	9
8月18日、東峰(7,295m)に7名が登頂しビパーク。翌日C 3.(6,000m)まで下山。20日、C 3から下山中、5,500m地点で高橋敏雄(44)が、クレバスの縁に積もった雪庇を踏み抜いて転落。アンザイレンしていたが止められず18m落ちて、右足が挟まった。このため救助したのは21日18時となり、クレバスから引き上げて直ぐに息を引き取った。その後遺体は収容された。『ヒマラヤNo.385号』							

新日本ヒマラヤ会議は楽しい!!

菅原 愛里

先日久しぶりにとても楽しい体験をした。会員は誰でも、ヒマラヤ関係のことなら『ヒマラヤ』に書いてもよいらしいので、その体験を投稿することにした。「今頃そんなこと言ってるのか?今まで何やってたんだ」という諸先輩方の声が聞こえてきそうだが、自分にとってはとにかく楽しかった。

STEP 1 - ナゾの地名

1月25日、HAJ主催の「新日本ヒマラヤ会議」に参加した。ヒマラヤへ行く予定のない私は、ぜひとも参加したいとは思っていなかった。ゲストがインド海軍の人だから、久しぶりにインディアン・イングリッシュでも聞いてみるか、ぐらいいの気持ちだった。サティアブラタ・ダム氏の講演が始まった。次々と繰り出されるスライドをぼんやりながめていた。そのうち、説明の中にある地名が繰り返し出てくることに気づいた。「アルガン・グラス」ーインドというよりは欧米圏の地名っぽいい雰囲気だなあ。初めて聞いたな。なんとはなしに、その地名をメモした。今までそうしてきた通り、あとで寺沢さんに教えてもらうつもりで。

STEP 2 - 調べてみるか

家に帰って、ふと思った。自分は今無職の身。時間はいくらでもあるし、多少の資料やパソコンもある。たまには人に頼らないで自分で調べてみるか、と珍しくそういう気になった。

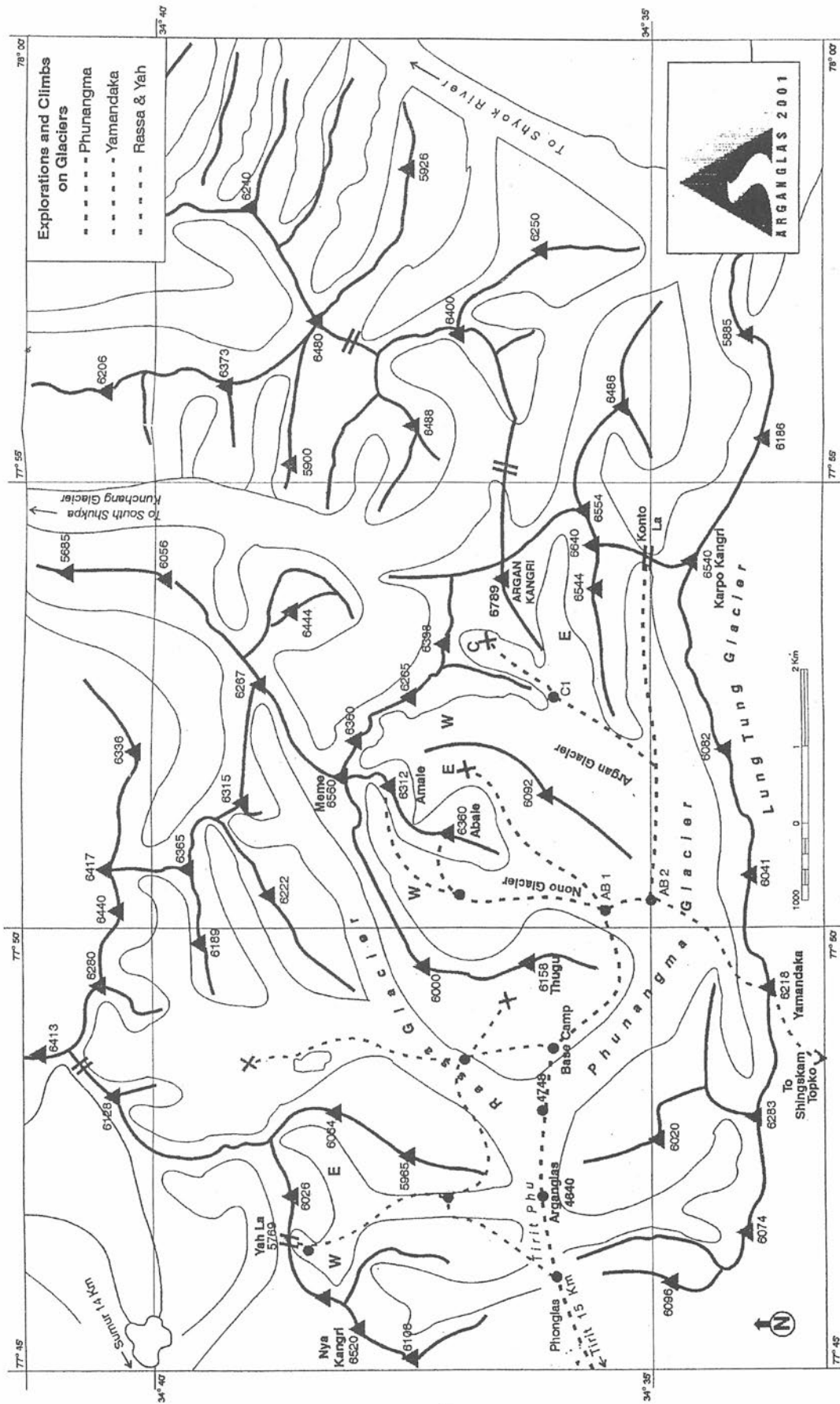
まず「アルガン・グラス」の響きから適当に英語の綴りを想定して、英和辞典を引いてみた。載っていない。「アルガン」もない。続いて、世界地図の索引欄を追ってみた。あった!カタカナ名の横に「アラ干」という漢字名があるのが少し気になったが、とにかく該当ページを開いてみた。タクラマカン砂漠の東端、楼蘭のそばにその地名は小さく載っていた。いくらヒマラヤに疎い私でも、これは違うと思った。がっかりした。次に、ヒマラヤン・ジャーナルのハリシュ・カパディア氏の著作『ハイ・ヒマラヤ・アンノウン・ヴァレーズ』という本を引っぱり出し、索引を見てみた。ない。中身まで丹念に拾う気力もない。

いよいよ、インター・ネットの検索エンジンで

探すことにした。「アルガン・グラス」と入力して検索すると、いきなり多数の情報にヒット。これはいけるかも、というより、こんな膨大な量の中から探すのか、早くもうんざりした。ざっと見てみるとほとんどアルガン・ツリーというモロッコ固有の樹木、その樹木から抽出したアルガン・オイルという薬用・美溶液に関する情報だ。今度は「アルガン+インド」で検索してみた。出てきた。期待に胸を膨らませたが、「アルガン美溶液はインドでも買えます」とか、インドのなんとかというものと一緒に美溶液を使うとより効果が、というネット販売のホーム・ページがほとんど。山に関するようなものが見当たらない。

ここらあたりから、絶対見つけてやるという意地が出てきた。「Argan+India」で検索。今度は英語のホーム・ページ情報なので、概要を読むのも骨が折れる。しかもまた美溶液系の情報ばかりだ。なんとかそれらしきものにヒットしてくれ、と情報をざっと読んでいく。ふと、一つの英単語が目に入った。「Bonington」。あの有名な登山家、クリス・ボンントンのことではないか?概要欄をよく見ると、「Argan Kangri」という単語もあった。Kangriは確か「山」という意味だったような気がする。その下には、Ladakhという単語もあった。20年前のヒマラヤ・デビューの時に訪れた、インド北部の地域だ。

どきどきしながら、見出しをクリックした。外国の旅行関係らしき会社のホーム・ページが開かれた。その中央にボンントン氏の顔写真があった。彼のホームページへ飛ぶ。遠征、という項目欄を選択した。見つけた。「Arganglas」を。そこは、ボンントン氏、カパディア氏、ダム氏他5名で、2001年8月中旬から9月にかけて行った遠征のベース・キャンプ地だった。



ボニントン氏は、その地名についてこう書いている。「我々は、地名の由来を次のように考えている。Arghanは、ラダック地方のコミュニティーを指す。ラダックの女性と、カシミールやヤルカンドからやって来たムスリムの商人や放牧者が、共に生活を営みながら築いてきた共同体だ。今も多くのArghan人がレーに住んでいる。Ganglasは、より高い地、または放牧地のことである。これらのことから、かつてArghan人達は、この特殊な場所を放牧のために使っていた、あるいは通年の居住地としても使っていたと思われる。彼らと、もともと住んでいた地元住民との関係が良好であったことがうかがえる」アルガングラスの正体が分かって嬉しくなった。欲はでてくるもので、今度は位置を知りたくなった。地図の項目を開いたら、活動山域のみで、レーからの位置関係が分からない。H A Jの『東部カラコルム』にも載っていない。ヒマラヤン・ジャーナルは2000年版までしかない。ここまできたら、どうしても位置を把握したい。寺沢さんに電話をして、ジャーナルに該記事があったらコピーを、とお願いした。

STEP 3 - H A J 図書館

数日後、用事で都心に出たついでにフラリとH A Jに立ち寄った。山森さんと岩崎さんがいらしゃった。そう言えば岩崎さん、インドのマモストン・カンリに行ってたっけ、ひよっとしたら知っているかなと思い、「アルガングラスという場所、知っていますか」と尋ねた。岩崎さんはいつも通りの穏やかな口調で「知らないなあ」と答えつつ、その口調に反した素早い動作でがっしりした箱ものを取り出してきた。『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』というタイトルがついていた。何枚もの大判の地図と解説本がセットになっていて、3万数千円也。とても一般人には手が出せない資料だ。

岩崎さんが当たりをつけて地図を次から次へと広げる。山森さんも「もうちょっと西じゃないか」「南じゃないか」と地図を覗き込んでいる。私は全く分からないので黙ってその様子を見つめるだけだ。程なく、岩崎さんが見つけてくれた。No. 12

の地図にArganglasが載っていた。ようやく、レーとの位置関係が分かった。さらに、解説本の中からArgan山群が載っているページまで見つけてくれた。さすが、H A J 図書館である。さすが、山森さん、岩崎さんである。位置が分かって、大満足だ。

STEP 4 - 惚れてしまった

2月に入り、84年のヒマラヤ・デビューでお世話になった先輩や、一緒に行った仲間に会う機会があった。久しぶりの再会を喜び合いながら、私は「またヒマラヤに行きたいねえ」と言った。仲間は（えっ）というような顔をしたが、言った自分もびっくりした。私は続けて「インドが今いいらしいよ。ほら、前にレーに行ったよね。あそこの北側辺りいいみたい」と話した。なぜか口が勝手に動いてしまう。彼らは彼らで戸惑いながら、「今年の話？」と返してくる。「今年は無理だよ。資料集めに時間が必要だし、雪訓や富士山の高所トレーニングも必要だし。来年あたりどうよ」と持ちかけた。そして、お互い考えておこうと約束して、別れた。その足でH A Jへ行き、なぜかNo. 12の地図をA 4版8枚分に分割コピーした。山森さんのご厚意で、ケニス・メイスン著作『ヒマラヤ』と、ディーレンフルト著作『ヒマラヤ第三の極地』もお借りした。

いったい自分は、何を考えようとしているのだろう。よく分からない。でもひとつだけ、はっきりしていることがある。「Arganglas」という地名に惚れてしまったことだ。カバディア氏のレポートは寺沢さんから入手し、ボニントン氏のレポートも、プリント・アウトした。これらの資料で、自分が何をしようとしているのかはまだはっきり見えない。ど素人の自分がトレッキング隊とか遠征隊を企画するなんて、そんなことは大それている。まあ、四の五の考えずにとりあえず、そろそろ働き出してお金を貯めよう、と思う。

中国、四川省・邛崃山系の岩峰登攀

スロベニアからの便り Andrej & Tanja Grmovsek

欧米のクライマーが近年たいへん注目しているのが四川省の邛崃山系、四姑娘山周辺および北部の岩峰群である。日本のクライマーも大内尚樹氏、H A J の西嶋鍊太郎氏が着目し成果を挙げている。2002年には英国のミック・ファウラーとポール・ラムスデンが四姑娘山主峰6,250m北壁をファウラーの美学を感じさせる見事なアルパイン・スタイルで初登攀した。この登攀はフランスで山岳賞をもらい、欧米の登山界では2002年のハイライトの一つであった。中国の山岳誌でも大きく取り上げられた。

ここに紹介するのは、スロベニアのクライマーの記録である。私が編集している日本山岳会の海外向け英文ジャーナルJapanese Alpine Newsに載せるために寄稿された簡単なりポート、写真、登攀ルートである。翻訳を試みた。ちなみに、彼らから出発前に中村のところに情報提供の依頼があった。

(構成・翻訳：中村 保)

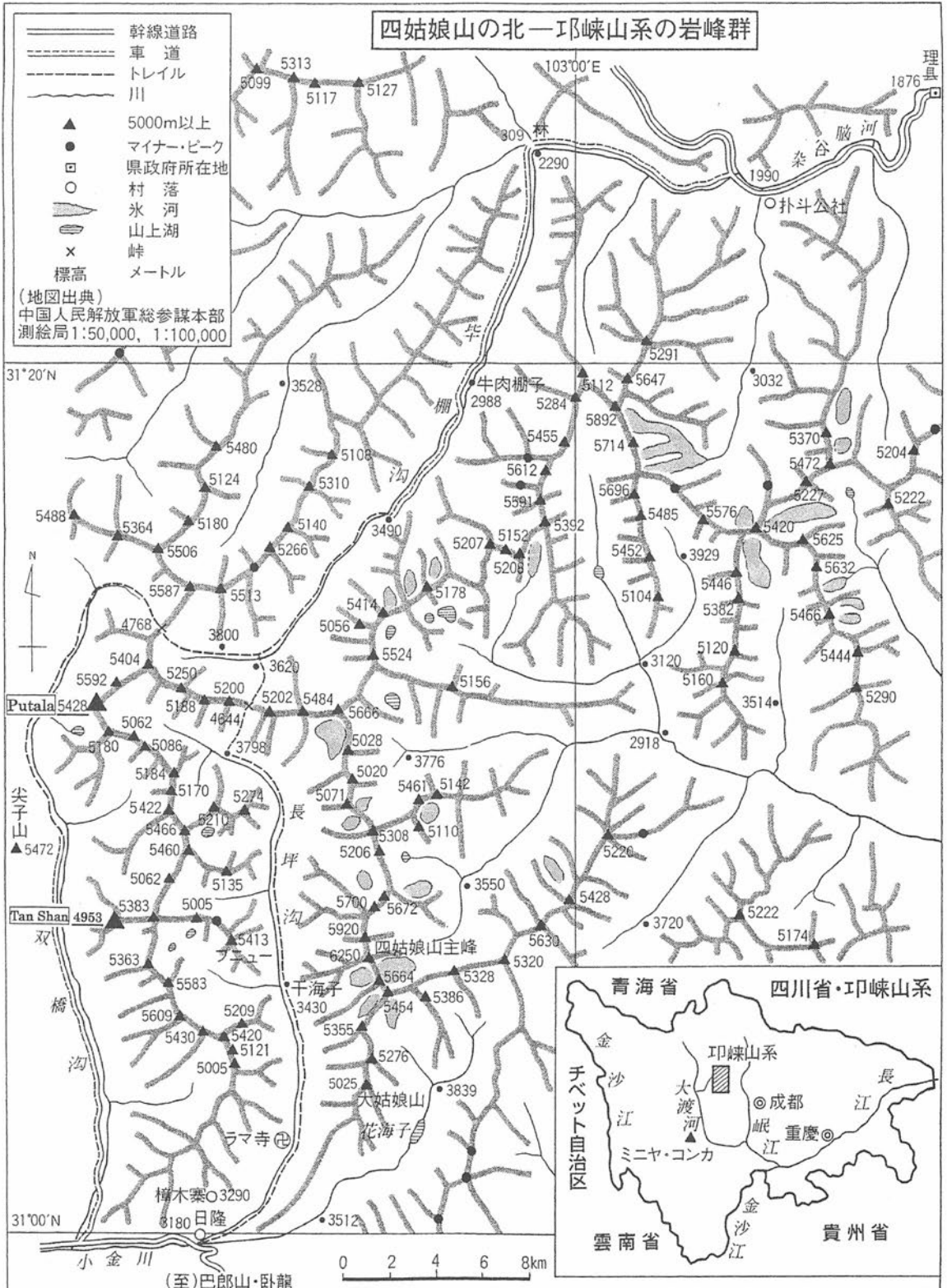
スロベニアからのスモール・エクスペディション、Andrej & Tanja Gromovsekのパーティーは2003年の春に邛崃山系での登攀を計画したが、SARSのため秋まで延期せざるをえなかった。2003年の9月の半ばに我われは四姑娘山の麓の村、日隆に着いた。我われの目的はクライマーが手を触れてないと思われる山域の花崗岩の大岩壁を登ることであった。我われの手元にあった情報は少なかったが、アメリカン・アルパイン・ジャーナル2000年号に掲載された中村保氏のテキストと幾つかの岩壁の写真に大いに触発された。他に、この地域を訪れた僅かのクライマーはいたが、悪天候に阻まれたり、ほとんどの登攀は不成功に終わっており、リポートとしてはあまり役に立たなかった。そのため、我われは機動性のある速攻スタイルでの登攀を計画した。

日隆から観光用のバスで双橋溝の谷に入った。この谷は長さ35km、標高5,000-5,600mの岩峰の連なり、高差1,000mに達する魅力的な花崗岩の岩壁がたくさんあり、全てが未踏である。(中村註：2002年の8月に大内尚樹氏の隊が谷の奥、左岸にある牛心山4,942mの西壁を初登攀している。)

アクセスは容易だった。バスでベースキャンプまで入れた。そこから4-7時間のハイキングで壁の取り付けまで達することができた。天気は悪く、非常に変わりやすかった。殆んど毎日雨が降った。

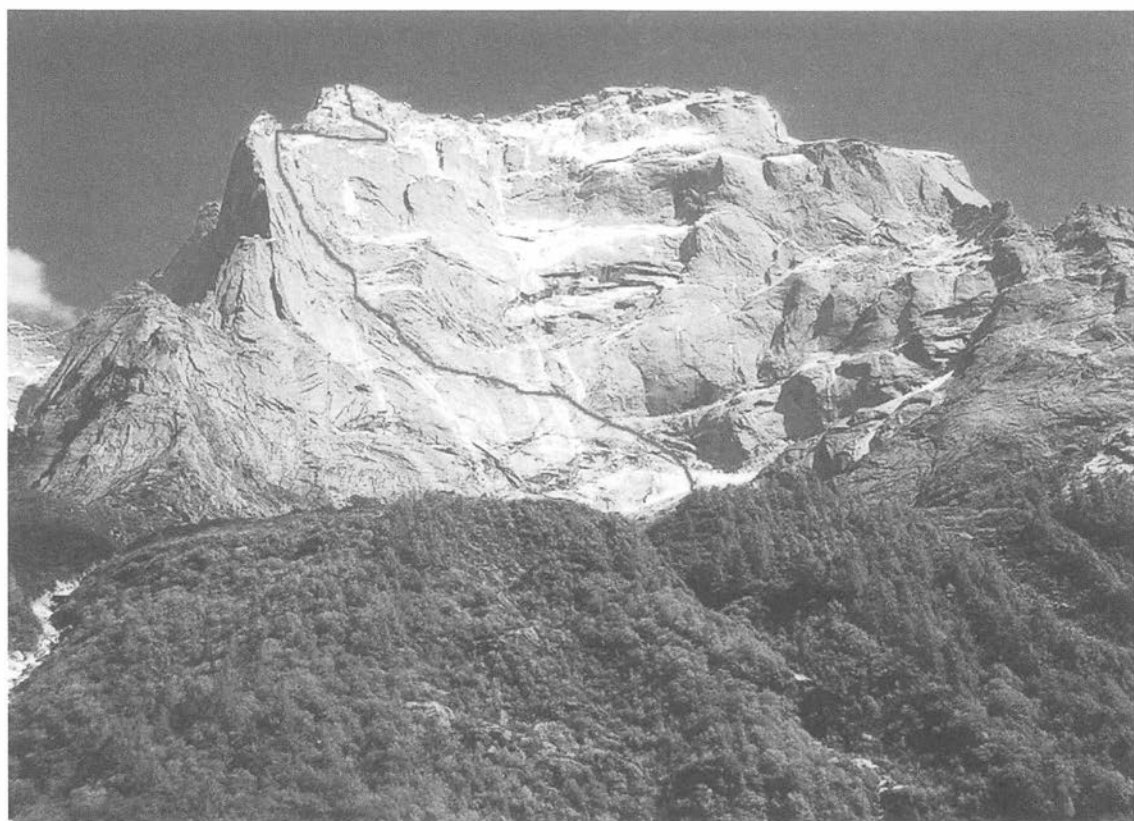
最初は高度順化のため簡単に低い岩壁を選んだ。2003年9月25日、その壁を1日で登った。グレードV、VIII/VII+obl、450m、11ピッチの登攀だった。多分標高4,943mの無名峰の南壁である。我われはこの山をTan Shanと命名した。プロテクションのためにフレンズだけを使った。したがって、登攀はしばしば危険に曝され慎重を要した。なかでも、つるつるの15mのスラブの最も困難なピッチは特に厳しかった。初登攀であった。

数日休養をとった後、次の目標であるPutala (ポタラ) Shan 5,428mの西壁に向かった。壁に積もっていた雪は最後の日には殆んど消えた。我われは運がよかった。クライミング・シューズ、必要なだけの衣類、ビバーク用の小さなザック、小さな水筒だけの装備で壁に取り付いた。我われは出来るかぎり速いスピードで登攀し、夕方には肩幅の広いピークの北峰に着いた。頂上で寒いビバークの一夜を過ごし、翌日アップザイレンで岩壁を下った。プロテクションと確保のためにはフレンズとナッツ以外は使わなかった。ルートの全長は約1,300m、登った壁の高差は約800mである。グライマ・ルートと名づけた。合計22ピッチ、グレードVI、VII-の素晴らしい初登攀であった。再び天気は悪化し雪が降り出した。今回の登攀はこれで終わったが、ここには登攀欲をそそるたくさんの魅力的な岩壁がクライマーを待っている。来年再び戻ってこよう。-Andrej and Tanja Grmovsek-

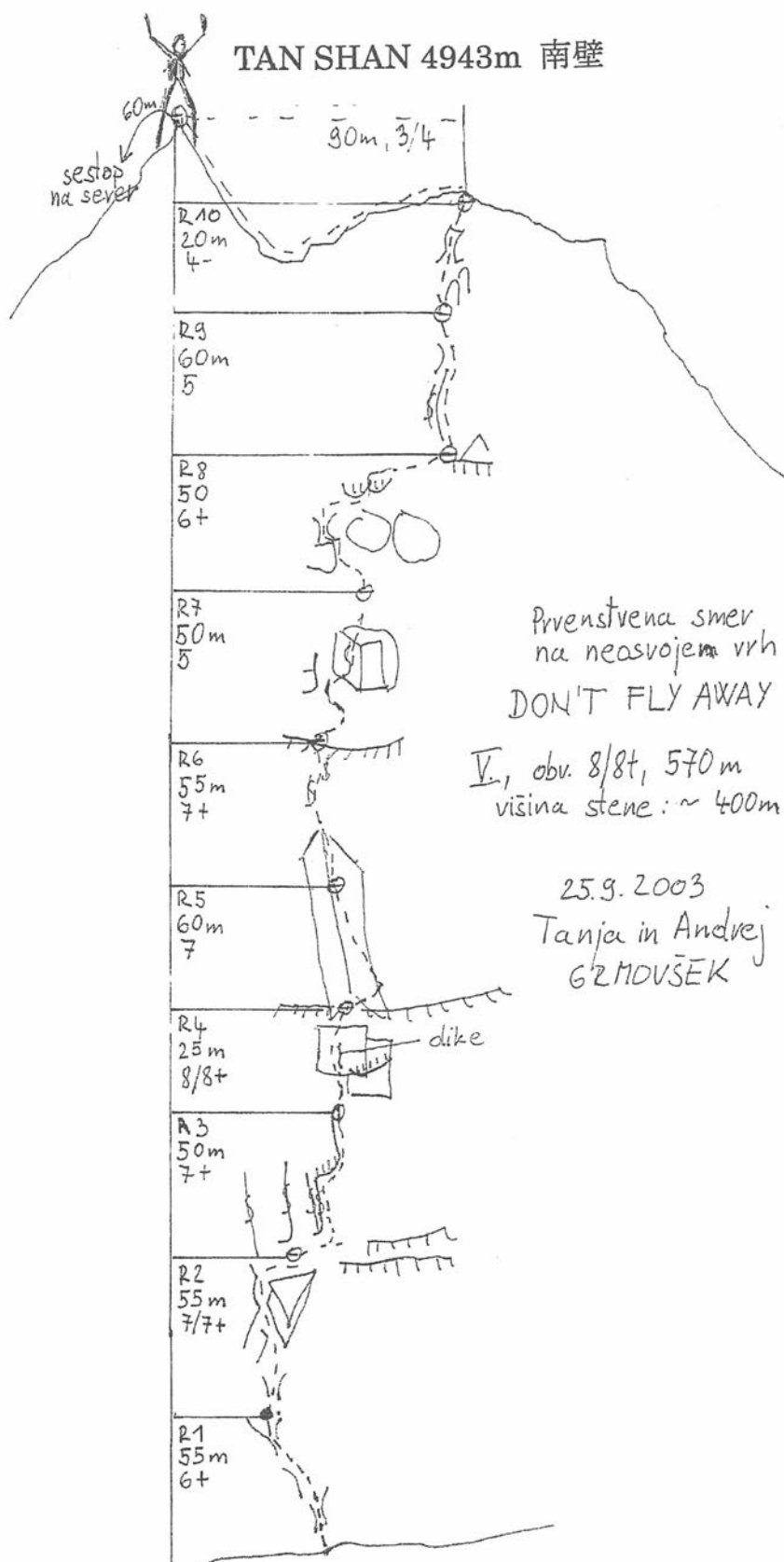




TAN SHAN 4,943m 南壁



PUTALA 5,428m 西壁



地域ニュース

《ネパール》

土佐ACがプモ・リヘ

土佐アルパインクラブは今春プモ・リ(7,165m)南稜からの登頂を目指す登山隊(入交忠誠隊長ら11名)を派遣する。期間は4月初めから5月中旬の40日間を予定している。

《パキスタン》

どさんこ同人がK2へ

どさんこ同人では今夏K2の南々東リブからの登頂を目指す登山隊(松本政英隊長ら5名)を派遣する。期間は5月下旬から8月下旬。K2はこの夏、1954年の初登頂から50年の節目を迎えるため相当の混雑が予想される。

トピックス

第12回 北海道海外登山研究会の開催案内

日時：2004年4月10日(土) 15時～11日 16時

場所：札幌市、「秀岳荘白石店」

白石区本通1丁目南2 TEL 011-860-1111

参加費：一般[一日のみ4千円、二日間 4500円]

学生[3千円] いずれも資料代込み。

申し込み：4月4日までに、郵便振替用紙に[氏名・住所・電話番号・所属山岳会・参加日・懇親会参加有無]を記入して費用を納入して下さい。

番号 02740-1-73965 「北海道海外登山研究会」

内容：10日イエティ捜索隊長 高橋好輝氏講演
11日道内関係者参加登山隊報告予定[(ネパール)ニレカ、チョラ・ツェ、パリラブチャ、カングリ・シャール、イムジャ・ツェ、ピサン・ピーク、(パキスタン) パスー、(中国) チョモランマ、(ペルー) ワスカランなど。

懇親会：10日午後7時から高橋講師を囲んで「つる」で行います。会費3千円。TEL 011-222-5053

第24回 日本登山医学シンポジウムのご案内

日時：2004年5月29日(土)～30日(日)

場所：東京女子医科大学 総合外来センター 5階

東京都新宿区河田町8-1 TEL 03-3353-8111

参加費：5千円(懇親会費は別途4千円予定)

テーマ：『登山者支援にエビデンスを求めて』

内容：シンポジウム[8,000m峰登山サポートの科学]

特別講演[三浦雄一郎氏を予定] その他一般演題。

連絡先：〒152-8866 東京都新宿区河田町8-1

東京女子医科大学附属脳神経センター神経内科

[橋本しをり] FAX 03-5269-7324

電話 03-3353-8111 (39232、PHS 28600)

e-mail: shashimo-tjo@umin.ac.jp

Books

初登頂 セリッククラムムスターグ

2001年に信濃高等学校教職員山岳会が、中国、新疆ウイグル自治区のカシタシ山群に派遣し初登頂に成功した登山隊の報告書。同隊は前年の2000年にも同峰に登山隊を派遣したが、6,405mで登頂を断念した。今回はその雪辱を果たし、山群の主峰である6,691mに4名全員が初登頂し「セリッククラムムスターグ」と命名したもの。

B5判68頁 カラー4頁 2004年1月21日刊

(連絡先) 〒333-2222 松本市岡田松岡214-6

大西浩 電話・FAX 0263-46-3926

■財政支援[2万円]平田清志 [1万円]屋代茂雄
[5千円]京極紳

東京集会のお知らせ

日時 3月29日(月) 午後7時～

内容 高峰登山計画書、報告書について

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

ロー・マンタンの空、遥かなり(19)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

ベース・キャンプを撤収

高橋 照

いよいよ今日はベース・キャンプを引き払う日になった。デーの村よりは沢山のゾブキョと馬が上がって来た。こんなに朝早くより集まって来ているのは、昨日中にデー村より上って来たに違いない。ゾブキョ以外にヤクもいるので、ヤク達はここに放牧されている中から、使役に使えるヤク達を選んだのだろう。私の馬もデー村より上って来た。

私達はタンゲ村への帰り道は、メ・ラ（峠）を越える道をとった。ポーター達は8時頃、家畜部隊は9時頃それぞれメ・ラに向かって登り出した。私は馬なので隊の最後から10時近くに出発した。ベース・キャンプ入りをした日は、雪とガスで視界はゼロだったが、今日は比較的天気が良いので附近の地形が良く判る。例の雨裂溝の多い泥の斜面を登って行くと、ブリクティのルートになったサムマル・コーラが長く長く続き、その奥にブリクティの山群があった。そして、眼下にひろがるナッカリ・ダモダール・クンダには、聖池は一つだけでなく幾つか点在していることも判った。1時間ちょっとの登りで4,850mのメ・ラに着く。峠のオボの下で隊員やポーター達が休んでいる。私も馬から下りて峠の上でしばらく休んだ。峠の向こう側には広大な斜面がひろがっており、正面にはカリガンダキ右岸の雪山と、その左にはドルポの山々が良く眺められた。雪線が大分下の方まで下っているようだった。

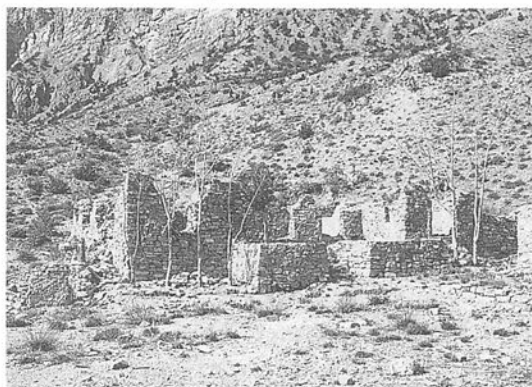
泥と瓦礫の大斜面を1時間ほど下ると、約1カ月前カムバの間道のコルから下ったところの広い草原に出た。上から見下ろすと沢山のポーターが一塊になって休んでいる。この草原の平地がゴーマル・ゴート（牧草地）なのである。ゴートより20分程下ったところに1つの台地があって、廃墟

と化した建物が10棟程あった。デー村の親類夫婦が住んでいるので、そこによって休みましようといつて、ドンドン下って行った。台地への下りはかなりの急坂なのと後ろから10頭程のヤクが横隊になって下って来たので私は馬から下り、手綱を引いてその建物に向かった。だんだん近寄るにしたがって、その廃墟と化した建物が、皆意外に大きなものであることが判った。その廃墟群の中に1軒だけ屋根があって塀のある建物があった。デー村の馬方はその建物に入ったのを私は見届けているので、その建物の前に馬を止め、家の中に入った。家の中には寝台と仏壇があり、その手前の部屋が炊事場になっていた。私が入ると若い細君がチベット茶と厚く焼いたチャパティを出してくれた。きっと馬方が先に下りてお客様をもてなすようにいったのだろう。細君に聞くと、ゴーマル・ゴートに山羊を放牧しているが、この建物をカルカとしてタンゲ村と共有で使っているとのことであった。この廃墟がゴーマル・ゴート・カムバ・ケームで、カムバ達の兵舎跡であったわけだ。建物はなおこの下流にも沢山あって、かなりひどく壊されているので実数は判らないが、少なくとも



▲ゴーマル・ゴート・カムバ・ケーム

▼下のカムパ・キャンプの跡



20軒以上はあるようであった。建物の大きさや数から推定して、千人ぐらいは充分住める規模なので、1個大隊ぐらい駐屯していたものと思われる。建物の外壁から想像して、馬小屋、兵舎、監視所、倉庫などに分けられているようであった。又、このカムパ・キャンプは両側が険しい岩壁で囲まれ、タンゲ・コーラの一支流に位置し高度にして4,200m～4,300m以上は充分あるので、難攻不落の兵舎で、いかにもゲリラ部隊の駐屯地としては申し分のない所である。そして、右側の岩壁には、約1カ月前私が雪の中を通ったカムバの間道が、ウルペカックに通じていた。そして、猫の額程の斜面には、耕作した跡が残っており、豊富な湧水もあって、水場の周りは草が青々と広がり、ビャクシン（シュクバ）の太木が茂っていた。カムバの兵舎の棟木は、皆附近に茂っているビャクシンの太木から作られた模様である。デー村の夫婦が住んでいるこのカルカには、大きなチベット犬がいて、この犬の吠える声を、私はカムバの間道のコルで待っている間に濃いガスを通して聞こえて来たのだった。

私はカムパ・キャンプで約2時間も長居してしまった。カムパ・キャンプより下流の道は谷沿いに山腹道が造られ、しかもその道は巾1m半もある良く整備された道で、路肩には石組がされている。これこそカムバの造った軍用道路とも思われる馬道であった。この道の途中には沢山のカムバの建物の廃墟が点在して、タンゲ・コーラに合流している地点の川下に橋が架けられ、道は対岸の山腹に通じていた。橋の袂には1個分隊なら充分住める建物があり、前庭は石垣で囲まれた馬を繋

ぎ止める広場になっていた。おそらく、橋の分哨というところだろう。橋を渡り対岸の尾根につけられた山腹道も、立派な軍用道路と思われる馬道がビャクシンの太木の間を縫ってつけられていた。タンゲ・コーラの本流はこの附近より下流は兩岸は大削壁になり、全く通行は不可能なゴルジュ地帯である。カムバはよくもこんな難攻不落な土地を選んだものだと感心した次第である。

タンゲ・コーラの木橋を渡り、対岸のビャクシンの多い山腹を1時間程行くと、その尾根を乗越す大きな峠に出た。峠の名前を聞くのを忘れてしまったが、これだけの峠なのだから名前はきっとあるに違いない。峠の高さは、前方遙か遠くに見えるツォーナムより延々と尾根道を通ってきて、最後にタンゲ村を初めて望見したヤク・コーラに下る峠と大体同じ高さなので、4,300mぐらいと思われる。この峠の上よりブリクティ山群が大体において全部眺められた。特に最高峰と思われるピークの右側には鋭い針峰が望まれたのが印象的であった。

デー村のポーターに、ここよりタンゲ村までの時間を聞くと、2時間と少しだというので15分程休んで4時ちょっと過ぎ峠を下り始めた。少し下ると左下に大きなゴートがあり、それよりは河岸段丘のような広い緩い斜面が続いていた。馬で下るには適当な緩さで斜面は延々と続いていた。1時間以上も下ったと思われたじぶん、黒い土の斜面の上に無数のカラガナの群落があり、日当たりの良い斜面なので、皆一斉に黄色い花をつけていた。そして前方にタンゲ村の河岸段丘を見下ろせる場所が、この長い河岸段丘の末端で、そのはず



▲タンゲ・コーラ左俣対岸尾根上のビャクシン

れに小さなオボがあった。斜面はそれよりは急斜面になって下のタンゲ・コーラに続いている。馬方が、河を渡るまで馬を降りてくれというので、私はそのオボのある肩より、タンゲ・コーラに向かって徒歩で下った。もうカラガナの群落はなくなり、それよりは雪渓のような塩の斜面を下ることになる。右側の谷も、その先の谷も、みな塩で出来た白い雪渓がタンゲ・コーラに向かって続いている。塩の斜面は岩盤のように固く、その表面は雪解けの水で何条もの筋が走っていた。歩きにくいことこの上ない。峠よりは2時間一寸でタンゲ・コーラの河岸に着き、木橋を渡るとナマのゴートに向かう道に合した。タンゲ村のキャンプに着いたのは夕方6時半。もう少し遅くなると暗くなるところであった。今日は500m登り、1,600m下ったわけである。実に長い長い一日であった。

翌日は一応タンゲ村で休日をとった。その理由は昨日はかなりの強行軍であったことと、5月28日、29日に一応ケサン・ナムギャル氏を通じて依頼しておいたムスタン国王とのインタビューがあったからである。予定していた28日、29日には、このタンゲ村にはまだ国王が来ていないことを確認したので、ことによったらというはかない期待感がTBSにも私達にもあったので、駄目だとは思ったが一日タンゲ村で待機することにしたのであった。

翌日の朝のことである。何もこれといって用もないので、天幕の前でボンヤリしていると、目の前のチョルテン（仏塔）群の周りを村のお内儀さん連中が、十数人で列を組んで廻り歩いて、ときどきマニ石に叩頭している。そして、しばらく間を置いて、又、チョルテンの周りを歩き廻り、マニ石や仏塔に叩頭している。一体何が起こったのだろう。遠藤が早速写真を撮りに出掛けたが、見事に追い返されて来た。炊事場に遊びに来ていたタンゲ村の者がいたので、ニマに質問させた。

「一体女どもはなにをしているんだい」とすると、タンゲの村人は、

「あれはミュン・ナといって、月に一回女達が、一日中断食して反省会をやっているんだ。チョルテンの周りを廻るのは大体午前中で終わるんだ」という話であった。この儀礼はおそらく、懺悔会(Smyun gnas)のことであろう。果たせる哉、

▼メ・ラよりタンゲ・コーラ左侯の上部を下る



午後には女達の姿は見られなかった。

私達は今回最大の目的だったロー・マンタンの城内に入ることが出来なかったが、ロー・マンタンについての情報を、私が1977年に潜入したときのことと、今回ロー・マンタンの城内に入ったキショールやタシの話も少し加えて、ここに簡単に述べることも、あながち蛇足ではないであろう。

私がロー・マンタンに1977年に入った時と、5年後の現在では、ロー・マンタンもだいぶ様変わりしているようである。

ムスタンとは外国人がつけた英語名或いは同系の言葉のようであるが、ケサン・ナムギャル氏に聞いても、その出典については全く判らないといていた。しかし、チベット学者の間では解明されているのかも知れない。私が考えるには、城のあるところというモンタン(smon than, or sman than)が、ムスタンとなまったのではないかと思う。

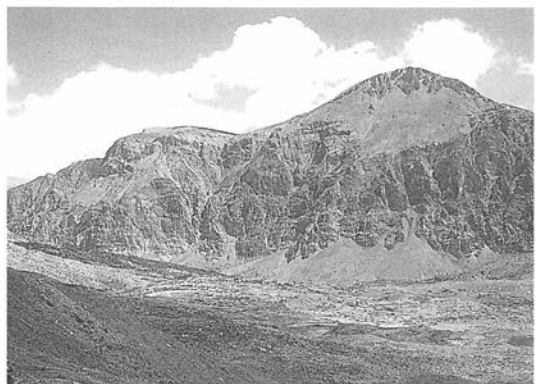
チベット名では、前にもちょっと述べたように、ロー・マンタン (Lo-Mangthan, <glo smon than>)、又はただロー (Lo, <glo>)と呼ばれている。行政的にはゴルカ王朝（現在のシャー王朝）を創設したプリットヴィ・ナラヤン・シャー王がネパールを平定し、ステートとして形式的に編入したようであるが、その時代のステートは、あくまでカトマンドゥ盆地を中心とした地域に限られていたので、その後行政区画として繰入れられたのは、ごく最近、現在の国王の祖父トリブヴェン国王の時、ラナ政権の終わった時である。しかもローの歴史は千年近くも前から独立した王国で、その歴史についてはケサン・ナムギャル氏が日本の大学より英文で発表されているようだ。とにかく

く、昔から相当な力を持った王国であったようだが、一時代西ネパールのバジャン王国に隷属してたことがあったようである。その理由としてムスタン国王のことをパルヴァール・トクーリー(Palval Thakurl)、チャラン王国の領主をヴィスタ・トリリー(Vista Thakurl)、マナンの領主をグルン・トクーリー(Gurung Thakurl)と西ネパールのガルカ(Garkha)の人達が呼んでいるのも興味がある。ガルカとは前にもちょっと触れているように、西ネパールのダルチュラ地方、ドーティ地方、バジャン地方にある村の一種で、一つのグループで住んでいるヴィレッジのことで、クマオン語である。

ムスタン人は一般にロー・パ(Lo-Pa, glo bo は人々)と呼ばれ、文化的には全面的にチベットの影響を受けており、風習も言語も大陸のチベット人と同じである。

ムスタン王国は、南のカク(12カ村、バーラ・ガウン)からロー(18カ村、アッターラ・ガウン)の二つの地域からなっていて、現在二つのパンチャヤットがある。人口は4,300人ぐらいだが、南方と交易のために移動するボテも多いので、正確な数字はつかめない。1977年私がローに行った時には、ムスタン城の入り口にネパール政府のチェック・ポストがあったが、現在ではその建物は学校になり、チェック・ポストはない、

ムスタン城内に住むムスタン人(ロー・パ)は、ほとんど全部が農耕と牧畜に従事し、チベット大陸の遊牧民とはまったく対照的である。城内には店舗というものはなかったが、一時カムバが一軒店を開いていた。現在その店は、マルファのヒラ



▲ナッカリ・ダモダール・クンダをふかん

チャンが、バッティ兼雑貨の店を開いている。最近ではネパール製の煙草より中国製の“竹熊”というブランドの煙草が良く出回っている。そして、中国製の洗剤(粉石鹼)や石鹼、トレーニング・パンツやジャンパーなどの繊維製品もかなり豊富にあるようだ。ムスタンの人達は南の人達とバター貿易をすることによって必需品を確保していたが、最近ではチベットとの交易も少しばかりではあるが復活して来たようである。極く最近まではネパール紙幣は全く通用せず、そのほとんどが銀貨や銅貨の重量による計算や、物交にたよっていたが、現在ではネパール紙幣が立派に通用するようになって来た。

ローの人達は各自に城外に畑を持っており、日の出とともに農耕に従事し、日没とともに城門が閉じるので、家に戻る。農産物としては3,500mを越す高地だというのに、小麦、大麦、ソバなどの穀物と菜種、カラシ菜(マスタード)、エンドウマメ、インゲンマメ、馬鈴薯、丸大根(カブ)などのほかに、最近ではキャベツ、カリフラワーといった高原野菜も作るようになった。

ムスタン地方は雨期というものが全くなく、モン・スーンの影響を受けるのはタック・コーラや、せいぜいジョムソムまでである。しかし、周囲の高い山であるムスタン・ヒマールの影響を少し受けるので降雪があり、その山より流れ落ちる雪解け水を引いて完全な灌漑農業を行っている。今後は乾燥と日照と灌漑をうまく利用して、ブドウ、桃、スモモ、アンズ、リンゴなどの栽培に期待がもたれている。特にこの高山乾燥地帯には作物をおかす害虫や細菌が今のところ皆無に近いという話なので全く理想的な地域だといえよう。夏は案外涼しく、特に6~9月は最もよい季節とされているが、冬は極端に寒く、マイナス40度以下にもなる厳しい気候であるそう。今回の5月中旬の大降雪は全く異常だというほかはない。

収穫は年に一回である。2月から4月にかけて種まきを行い、9月から10月にかけてが収穫期である。農耕の方法は人力とヤクやゾブキョの家畜を使って行われている。種まきや収穫の日時は、それを占う人がおり、最終的には国王が決定を下す。農事を占う人はラマ(僧侶)ではない。ムス

タンには七つの農耕地帯があり、3,500m～3,600m台の低地に四つ、中高地に二つ、4,000m台の高地に一つある。種まきの日を国王が決定すると、全村民が集まって種まきの儀礼を行う。

国王も自分の畑を高地帯に持っていて、自ら種まきの儀礼を行い、種をまく。低い土地では、それより前に国王の許しを受けて種をまく。

農耕に従事する者は、男も女も平等で子供も一緒に働き、特に女は非常な働き者である。

チベット暦の7月22日（太陽暦の10月）には収穫祭があって、収穫が始まる。一年で一番忙しい収穫期が終わって、冬の訪れが感じはじめる11月になると、ムスタンの全部とはいわないが、人々は少しづつ南下し始める。10月には低い地帯の人々、11月には中高地の人々が、それぞれ収穫を終えて出発するのである。そして、春の訪れるとともに、南の穀物や雑貨を仕入れて戻ってくる。そして再び種まきが始まるのである。

この地方のボテは一妻多夫である。婚前交渉は自由で、2、3人子供が出来てから結婚することもある。そして普通財産は長男が継ぎ、次男以下は原則としてラマになる。しかし長男のところに嫁いできた嫁は、長男の弟達を口説いて、第二、第三の夫を作る。口説き方がうまく、沢山の夫を持つほど、その嫁は賢い女と人にいわれる。だが嫁が夫以外の兄弟を一人でも口説きそこなうと、村人達に軽蔑される。そして、生まれた子供達は全部長男の子供となる。次男以下の兄弟は、長男の嫁と一緒にあったときのみ、財産に対する権利が生じ、兄嫁と一緒にあった弟が別の女を作った場合は罰金を払う。払わないときは、長男の嫁がその女の髪をずたずたに切り、顔に墨を塗りたくる。罰金の額は村の長老達が決める。

長男が結婚するときは盛大に宴を催すが、次男、三男が口説かれて一緒にあったときは何もしない。そして、口説かれてあとから一緒にあった次男、三男は長男の嫁に一筆入れる。しかし最近ではこの風習はくずれて来ており、一妻二夫が普通で、一妻三夫、一妻四夫は少なくなっている。

結婚の日取りについても、吉日、吉月があり、嫁入りするときは穀物、家畜、現金などの持参金を持って来る。また婚約時には、男は家から数回

▼塩の斜面



にわたり大量のチャン（どぶろく）を持ち出し、相手方に交渉しに行く。そして、チャンの量が多いほど、その男の信用度は高い。

男と女はおたがいに顔にギイをつけあって、合意を取りつける。なかなか話がまとまらないときは、男は女を略奪して三日の間は、女の家族は何もいうことが出来ない。三日過ぎてから、女が嫌いだと言ったら、その結婚は破談となり、女がいいと言ったら結婚は成立するのである。

結婚していけない月は、チベット暦（陰暦）の第7月と第12月で、12年に一回めぐってくる黒い年（陰暦は13月あるので、12年に一回調整しないと太陽暦と合わなくなる）にはだれも結婚しない。また、刈入れをしてからは結婚はいけなし、土地に作物がないときは結婚してはいけない。だから、どうしても結婚したいときには、畑に種をまいてから結婚する。

国王が王妃をもらう場合は、必ずチベットのラサの女性をもらう。今の王妃もラサの人である。

ロー地方（カク地方も）のボテの葬式は鳥葬である。ネパール政府は鳥葬の儀礼を禁止しているが、ムスタン国王の存在を認めている間は、宗教、風習などを尊重し、この問題については干渉を避けているようだ。しかし、ドルボ地区のボテの鳥葬はかなり前から禁止されている。

葬式の儀礼は、ラマや祈祷師がツイゴルゼ（Tsuigorze）という新聞紙大のルナ・カレンダーを見て死者の生まれた日、死んだ日、時刻、干支などを調べて、土葬にするか、水葬にするか、風葬にするか、火葬にするか、鳥葬にするかを決める。ふつう貧乏人は水葬か風葬で、火葬は薪代が

▼カラガナ



高くつくので金持ちや僧侶や身分の高い人が多い。鳥葬は死体を細かく切り刻み、頭は石でつぶして食べやすいようにして、秃鷹などの猛禽に与える。この風習は死者の魂を鳥が天に運ぶのだと信じているからである。国王の場合は例外なく火葬であるが、ロー・マンタンの習慣としては鳥葬が多い。しかし貧乏人には僧侶へのお布施が高くつくので鳥葬でない場合が多い。そして、鳥葬が終わると七日ごとに葬儀を行い、49日にはラマを呼んで盛大に回向する。

子供が誕生すると、3日目にラマを呼んで清めの祈祷をして貰い、命名はラマがする。これも3日目の行事で、生まれた曜日が名前になる。

ロー・マンタンは城壁に囲まれた城郭都市で、一カ所だけ城門があって、日の出とともに開き、日没とともに門は閉じる。城壁及び城内の家は全部日干し煉瓦でできている。木型を作り、泥を入れて天日で乾かした煉瓦で、壁構造の建築様式である。壁の上には木を渡して板や、ドロ柳の小枝を敷き、その上に15センチほどの土をのせて固め、屋根も同様にして造る。この煉瓦工場（工場といっても建物は無いが）は城外にかなりな規模のもの

▼日干しレンガエ



があって、10人以上の人達が連日日干し煉瓦を造っている。海底のせり上がった粘土なので日干し煉瓦としてはかなり良質なものである。

家を新築したときは、家の中に金属の器をすえて火で熱し、油を入れて煮立たせ、火をつける。こうして祈ると、火除けのまじないになるそうだ。

金持ちはたいてい家を2軒持っていて、その1軒には老夫婦が住む。あまり金持ちでない者は同一家屋内に老夫婦も起居する。しかし、61歳の還暦になると、息子達と別居しなくてはならない。そのときは、日本の還暦のお祝いと同じように盛大にお祝いをする。息子達は老夫婦に土地を分けてやり、老後も農耕して生活ができるようにする。老人が畑を耕せないようになった時は息子が耕し、その畑のあがりて老人達は生活する。

病気になるとラマに祈ってもらうか、漢方医のような薬草を採取しているアムジーという医者にかかる。人々はアムジーより投薬してもらうより、ラマによる祈祷の方を信じているが、それだけにもものすごくお金がかかるそうである。しかし、ラマの中には、ラサで医学や薬学を勉強してドクターの資格を持った人もいるということだ。



◀ 峠よりブリクティ連山遠望

神秘の地チベットへ、幻の花「ブルーポピー」を見に行こう！

HAJニンチン・カンサトレッキング隊員募集

HAJがこれまで過去4回サマーキャンプを実施したニンチン・カンサBCへのトレッキングです。拉薩（ラサ）の街を俯瞰したり、チベット仏教の聖なる湖ヤムドクツォを眺望し、夏の高原をトレックしながら幻の花ブルーポピーや咲き乱れる小さく可憐な花々との出会いを楽しめます。

フライトスケジュールによって日程が変更される場合があります。

○料金：435,000円 ○募集人員：15名限定（最少催行人員10名） 定員になり次第〆切

○HAJの岩崎洋専務理事が同行 ○問い合わせ先：HAJ事務局

	月・日	都 市 名	交通機関	摘 要
1	7月28日 (水)	成田～北京～成都	CA452	空路、北京経由四川省の成都へ。〈成都／ホテル〉
2	7月29日 (木)	成都～拉薩	国内線	空路、チベット自治区の中心地拉薩へ。 〈拉薩／ホテル〉
3	7月30日 (金)	拉薩	専用車	終日、ポタラ宮、大昭寺、八角街などの観光。 〈拉薩／ホテル〉
4	7月31日 (土)	拉薩	トレッキング	拉薩近郊のブンバ・リ(4200m)登山で高所順応。 〈拉薩／ホテル〉
5	8月1日 (日)	拉薩～ランカーズ	専用車	専用車にてランカーズへ。天候が良ければ、途中のカンバ・ラからは青く美しいヤムドク・ツォやニンチン・カンサの雄大な景色が眺められます。〈ランカーズ／招待所〉
6	8月2日 (月)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね4700m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
7	8月3日 (火)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね5000m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
8	8月4日 (水)	ランカーズ～マヨン村～ニンチン・カンサBC	専用車、 トレッキング	専用車にてカロ・ラ(5045m)を越え、マヨン村へ。マヨン村からニンチン・カンサBCまでのトレッキング（約3時間）。〈ニンチン・カンサBC／テント泊〉
9	8月5日 (木)	ニンチン・カンサBC	トレッキング	ニンチン・カンサBC付近のトレッキングとブルーポピーなどの高山植物の観察 〈BC／テント泊〉
10	8月6日 (金)	ニンチン・カンサBC～マヨン村～拉薩	トレッキング、 専用車	往路を拉薩まで戻ります。〈拉薩／ホテル泊〉
11	8月7日 (土)	拉薩～成都	国内線	国内線にて成都まで戻ります。〈成都／ホテル泊〉
12	8月8日 (日)	成都	専用車	終日、成都市内観光とショッピング。 〈成都／ホテル泊〉
13	8月9日 (月)	成都～北京～成田	CA451	空路帰国の途へ。到着後解散。

新貝勲 (SHINKAI Isao) 1931.1.3~1989.7.12

福岡県福岡市生れ。県立福岡工業高校(旧制)で野球部に所属。プロ野球の阪急から誘われたが父親が死に断念し福岡少年鑑別所に奉職。20歳頃から登山を開始。1958年アルパイン山荘会入会。62年福岡登高会会長。1964年夏、奥又白にて「大山元谷同人」結成。その頃、福岡の集まり「スタインボックの会」に参加、海外登山の啓発を受ける。66年(冬)福岡登高会がニュージーランドに派遣した登山隊(隊長ら5名)を率いてMt. クック(3,764m)に登山。69年(夏)福岡県山岳連盟が派遣したヒンズークシュのティリッチ・ミール(7,706m)登山隊(末松大助隊長ら17名)の副隊長として参加したが隊は7,620mまで到達したものの時間切れで登頂を断念した。70年旗揚げした全国的な集団の「ヒンズークシュ会議(その後、ヒンズークシュ・カラコルム会議・略称HK T)」に参加し中心メンバーとなる。74年(夏)全西日本カラコルム登山隊(隊長ら12名)を率いてパサー峰(7,478m)に挑戦したが7,050mに到達したところで悪天候のため登頂を断念した。1977年(夏)HK Tが主管したK 2の第二登を目指す日山協登山隊(隊長ら47名)を率いて南東稜に入山、8月8日、重廣恒夫、中村省爾、高塚武由が3名が第二登に成功。9日にも広島三朗ら3名とパキスタン側隊員のアシュラフ・アマンも登頂し、パキスタン人としてK 2初登頂を成し遂げた。この成功により新貝の名は登山界において不動のものとなった。78年(夏)福岡登高会がティリッチ・ミールに派遣した登山隊(池辺勝利隊長ら10名)の総隊長として参加、隊は69年の雪辱を果たし、7月26日3名が登頂に成功した。82年(夏)日山協がK 2(8,611m、中国名チョゴリ)に中国側から無酸素で初登攀を目指す隊(隊長ら49名)の隊長として北稜に入山。8月14日、坂下直枝、柳沢幸弘、吉野寛の3名が初登攀に成功し、翌15日にも高見和成ら4名も登頂した。これによって新貝は世界第二の高峰、K 2の南北両側からの登攀を成功させ名実共に日本を代表するリーダーとなった。だが皮肉にもその日、第一次隊の柳沢がビバークの疲労のた

め約8,000m地点から滑落死亡し、医師として参加していた坂野俊孝もBCの裏山で死亡するという遭難も発生した。83年(夏)ナンガ・パルバット(8,126m)の南西稜からの登頂を目指す福岡登高会の登山隊(大石義豊隊長ら16名)の総隊長として入山し、隊はC5(7,500m)まで到達したが、雪崩のためC1の3名が死亡し登頂を断念した。85年(夏)パサー・東峰(7,295m)とナンガ・パルバットの雪辱を目指し福岡登高会を率いて(隊長ら6名)で入山。先ずパサー・東峰に向かい7月12日、手前のII峰(6,842m)に2名とHAP 2名が初登頂。14日には山内耕二、西田哲朗とHAP 2名が東峰の登頂に成功した。次いでナンガ・パルバット南西稜に挑戦したが、7,250mに到達したものの登頂はならなかった。88年アジア太平洋博覧会開催記念企画「ヤップ・カヌー5000キロの旅」随伴船隊長。80年から日本山岳協会海外特別委員。89年7月8日夜、帰宅途中、自宅付近で交通事故に遭い、意識不明のまま12日死去。本人はヒマラヤの高峰の山頂には立たなかったが、オルガナイザーとして誰からも慕われた名将であった。著書に「我が心魂のK 2」(1978年)、追悼集に「氷河の暖風」(1991年)がある。

吉野寛 (YOSHINO Hiroshi) 1950.2.3~1983.10.9

東京都杉並区生れ。1968年東海大学に入学しWV部で登山を始める。69年11月、東京雲稜会に入会。北岳、穂高岳、剣岳、谷川岳などの岩場を四季にわたり登攀。77年7月、東京雲稜会を退会し、その夏ヨーロッパに渡りチベッタ北西壁、マルモラダ・ディ・ロッカ南壁、ブレチエール西ピラーなどを登攀。9月末に帰国後「登攀クラブ蒼氷」を創立し代表となる。78年(春)イエティ同人がダウラギリ I (8,167m)柱状南岩稜に派遣した登山隊(雨宮節隊長ら13名)に参加。5月11日に清水清二、加藤康二、アン・カミと共に第二次登頂に成功した。(日本人八千メートル登頂者31番目)79年(夏)山幸とマウンテントリップ主催の登山学校隊(隊長以下9名)を率いてインド、ディオティバ(6,001m)に登山、8月19日登頂。中国側エヴェレスト(チョモランマ)の初めての登山許

可(80年春)をJACが取得した。吉野も北西壁隊の準備活動に参加したものの登攀形式の違いから本番への参加を辞退した。81年(春)国土庁が南硫黄島に派遣した火山調査隊のサポートして現地に行くが、悪天候のため上陸はできなかった。同年(秋)イエティ同人隊(隊長以下12名)の隊長としてアンナプルナI(8,091m)南壁の初登攀を目指して入山。10月24日～25日の二日間でC5(7,500m)から小林利明と7,800mまでルート工作を行う。29日、柳沢幸弘と青田浩が初登攀に成功したものの第二次隊の加藤康二が8,000m付近で転落行方不明となり登山は中止された。82年(夏)K2の北面(中国名・チョゴリ8,611m)から無酸素で北稜の初登攀を目指した日本山岳協会隊(新貝勲隊長ら49名)に参加、8月14日、坂下直枝、柳沢幸弘と初登攀に成功するが帰路、8,400m地点でビバークとなり翌朝50m下でビバークして疲労していた柳沢に付き添い、第二次隊からロープを受取り柳沢を固定ロープの始まる8,000m付近まで下ろしロープを解いたが、その一瞬のうちに柳沢は転落死亡した。C2に降りた吉野に凍傷を心配した登攀隊長の小西政継が酸素を吸うことを勧め、いったんは断ったものの最終的には酸素を吸った。83年(秋)イエティ同人隊(隊長ら5名)の隊長としてエヴェレストの無酸素登頂を目指して南東稜に入山。10月8日、山学同志会隊の鈴木昇己、川村晴一、イエティ隊の遠藤晴行、禿博信と登頂に成功(日本人として初の無酸素登頂)するも、ヒラリー・ステップ下でビバークとなり翌日朝、転落死亡した。遺体は11日に南西壁下で発見された。遺稿追悼集に「稜線」(1985年)がある。

小松幸三(KOMATSU Kozo) 1954.5.24～1989.2.24
高知県高知市生れ。1957年東京に転居。68年佼正学園高校に入学し山岳部で登山開始。72年、GHM・Jに入会。谷川岳、穂高岳などの岩壁登攀を主に登山経験を積む。75年(秋)カモシカ同人がダウラギリIV(7,661m)に派遣した登山隊(高橋和之ら14名)に参加、10月21日第三次隊として宮崎勉、中村省爾とミヤグディ・マータ内院から登頂に成功。78年(春)明星大学を卒業しヒマラヤ観光開発に入社。79年(秋)カモシカ同人がダウ

ラギリII(7,751m)～III(7,715m)～V(7,618m)の縦走を目指して派遣した登山隊(高橋通子隊長ら17名)に副隊長として参加。10月13日II峰に登頂し、翌日千葉孝義、瀬津晃二、荒木重嗣、古賀幸夫と縦走を開始、15日III峰に登頂、16日V峰に登頂して縦走に成功。81年東京都山岳連盟海外委員。82年(秋)カモシカ同人がダウラギリI(8,167m)の北壁ベアールート初登攀を目指して派遣した登山隊(佐々木徳雄隊長ら18名)に参加、10月18日、山田昇、斎藤安平と初登攀に成功。世界で初めてダウラギリ山群のI峰～V峰の登頂に成功した。89年2月、五大陸最高峰冬期登頂を目指す山田昇隊に参加して、マッキンリー(6,194m)に入山したが、2月24日山田昇、三枝照雄と共に遭難死亡した。トータル獲得標高は23,579m。遺稿追悼集に「ダウラギリに魅せられた男」(1992年)がある。

三枝照雄(SAEGUSA Teruo) 1957.10.28～1989.2.24
群馬県沼田市生れ。1972年、県立沼田高校に入学し山岳部に所属して登山を開始。谷川岳などを登り76年、法政大学第二社会学部に入学。II部山岳部に入る。上越や劔岳、甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳などの四季の登攀で登山経験を積んだ。初めてのヒマラヤは、高校の先輩である山田昇の関係から83年冬にカモシカ同人がチョモランマ北西壁へ派遣した登山隊(高橋通子隊長ら21名)への参加であった。その後は群馬岳連のメンバーとしてのヒマラヤ通いが続く。84年(冬)アンナプルナI(8,091m)南壁隊(八木原暁明隊長ら15名)は悪天候で失敗したが、85年(秋)植村直己物語撮影隊(八木原暁明隊長ら11名)に参加し、10月30日南東稜からサガルマータの登頂に成功(日本人八千メートル登頂98番目、同エヴェレスト登頂22番目)した。87年(冬)は雪辱を期す群馬岳連隊で再びアンナプルナI南壁に入山。12月20日、山田昇、斎藤安平、小林俊之と冬期初登攀に成功するが下山中、小林、斎藤が相次いで転落行方不明となってしまった。88年(春)JACと中国、ネパールが合同で実施した「エヴェレスト交差縦走登山隊」の撮影班に参加、5月5日TVカメラを携えて登頂に成功。日本人としては、加藤保男、尾崎隆、山田昇に次ぐ4人目の最高峰2回、南北登頂者となった。同

年(秋)H A J が派遣したシジャパンマ(8,027m)～チャー・オユー(8,201m)連続登頂登山隊(山田昇隊長ら4名)に参加し、10月24日シジャパンマ、11月6日チャー・オユーの登頂に成功し、日本人としては山田昇に次ぐ二人目のハット・トリックを完成させた。89年(冬)山田昇の冬期マッキンリー登山隊に参加し、山田、小松と共に烈風のため遭難死亡した。死亡した年の12月31日現在のトータル獲得標高42,015mは加藤保男に次ぐ12位にランクされている。追悼集にH M C O B 会会報「三枝照雄君追悼号」(平成元年)がある。

山崎彰人(YAMAZAKI Akito) 1967.7.24 ~1996.7.21
愛知県丹羽郡大口町生れ。1987年岐阜大学WV部で登山開始。その後山岳部に移籍。北アルプスを中心に経験を積んだ。89年(夏)J A C 東海が中国、雪蓮峰(6,627m)に派遣した登山隊(小川務隊長ら9名)に参加。7月14日、篠崎純一と南峰(6,450m)に登頂。91年秋J A C 東海がネパールに派遣した気象観測ロボット設置隊参加し、無名峰(5,816m)、イムジャ・ツェ(6,160m)に登頂。93年(夏)、J A C 東海が中国、クラウン(7,295m)

に派遣した登山隊(徳島和男隊長ら12名)に参加、7月22日、徳島隊長、有富保之と初登頂に成功。94年(夏)岐阜大学が中国領カラコルムのチリン(チャントック I 7,038m)に派遣した登山隊(藤井洋隊長ら10名)に参加、7月19日、吉田弘樹、川口秀樹と初登頂に成功。28日、隣接するチャントック II (6,972m)にも吉田、阪谷正人、加藤博、渡辺綾美と初登頂した。96年J A C 東海隊の隊長として、松岡清司とパキスタンの難峰、ウルタル II (7,388m)にアルパイン・スタイルで挑戦し、7月11日初登頂に成功した。この登攀は日本ヒマラヤ協会のアンケートで日本人の行ったヒマラヤ・クライミングのトップ5にランクされた。しかし、下山中、悪天候に陥まり食糧のないまま19日ABCに辿り着いた。そこにはH A P によって食糧が荷上げされていた。二人はABCで体力回復を計っていたが、20日から山崎の様子がおかしくなり21日23時過ぎにABCの天幕内にて死亡した。カヌー、ハンググライダーも愛した「カリスマ」的な存在だった。トータル獲得標高は21,721m。報告追悼集に「ウルタルII峰 さくっと登ってきます」(1997年)がある。

■ 寸 感 ■

2月19日、NMAのアン・ツェリン会長が来会し、山岳6団体が「ポカラ国際山岳博物館」建立のために資金援助したお礼としての「楯」を持参された。2月にグランド・オープンセレモニーを終えてようやく本格的に始動した模様である。

2月21日、日山協が招待した韓国岳人と会った。特に雑誌「マウンテン」を発行する南善祐氏や、ヒマラヤクラブの呉仁煥氏とは1995年のラサ以来の再開であった。南氏の資料整理には定評があり、今回の内容も勝れていた。(山森)

事務局日誌(2月)

- 3日(火) 「高峰登山計画書、報告書」関係書類を関係4団体実務者へFAX。
- 6日(金) 「野沢井歩君合同追悼会」費用決算等を関係3団体の長へ郵送
- 7日(土) 「高峰登山計画書、報告書」関係書

類を理事、監事、評議員へ通知

- 9日(月) ヒマラヤ388号発送
- 19日(木) ネパール山岳協会(NMA)アン・ツェリン会長来会懇談(ポカラ国際山岳博物館楯を戴く。神崎忠男氏)
- 21日(土) ~22日(日) 日山協第42回「海外登山技術研究会」於、八王子(山森)
- 23日(月) 東京集会(12名)

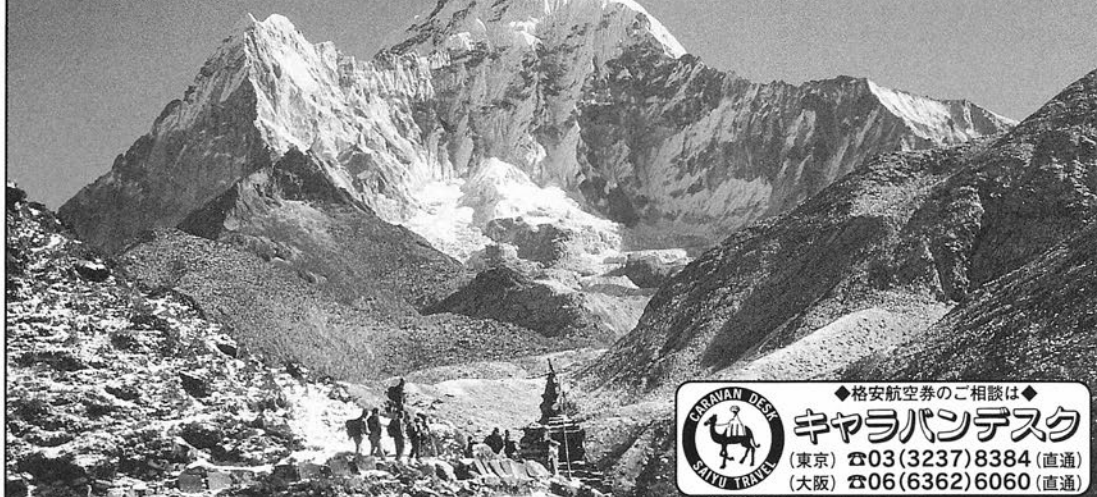
ヒマラヤ No.389 (4月号)

平成16年3月10日印刷 16年4月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆
キャラバンデスク
(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料) をご利用下さい。

0120-811395

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区千代田2-1-4 日比谷中ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
<http://www.tokyo-np.co.jp/book>

最新 クライミング技術	山小屋の主人の 炉端話	チャレシオナルバインクライミング セアルス編	すぐ役立つ 山の気象と救急法	すぐ役立つ 記念日の山に登ろう	すぐ役立つ 山のメモ帖	中高年の雪山入門	すぐ役立つ 新・山の雑学ノート・第1集	女性ガイドの しなやか登山術	新・山靴の音	中高年登山 なんでも百科	登山の 運動生理学百科	山書散策
ジム・グレタのフリークライミングからルンヂエチ、 アルパイン・ビッグウォールまで、すべてのロッククライ マーに必要の書。二つの技術を結ぶなるクライミング とは、その意味や、過半数を占める岩登りや、 解明、実践的なクライミングのノウハウ、心構えなども 細かくアドバイス。	著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に 炉端で語る一話の取っ掛かりのお話。	北アルプス全峰を代表する77のルートを分かりや すく解説したルート案内書。	山の気象遭難を回避するための天気判断と、 事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。	人それぞれの記念日の日付と標高が致す る山はどこに。	『巨人』連載の「山の雑学ノート」から95編 の話題を取り上げた、山のウチウチを深め、 安全登山の指針となる冊。	低山から夢のヒマラヤまで、トフルを 未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、 雪山歩きを楽しむ。	山の話題が盛りだくさんの数だけではない、 豊かな雄大な山をより深くより安全に楽しめたい。 豊かな雄大な山をより深くより安全に楽しめたい。	常識にとらわれず、自在に知恵を働かせられ ば山はもっと素敵になると呼びかける、女 性登山ガイドのユニークな登山講座。	還暦をむかえた筆者が山への思いと、山の仲 間との交遊を綴る。	「登山に年齢はない」と主張する著者が、よ り安全により快適に登山を楽しむよう、 中高年登山の虎の巻。	「いついつ合理的で安全な登山ができる のかを、ヒマラヤなど高所登山実感を踏ま えて、分かりやすくまとめた。	今まで数多く発行された「山書」同様に読んでもよいが、 そんな時の指針として――『巨人』連載時から好評。
菊地敏之 著	工藤隆雄 著	廣川健太郎 著	飯田睦治郎 著 桜井博幸 著	石井光造 著	岳人編集部編	福島正明 著	岳人編集部編	樋口英子 著	芳野満彦 著	福島正明 著	山本正嘉 著	河村正之 著
1600円	1500円	2500円	1359円	1300円	1400円	1600円	1400円	1500円	1262円	1500円	2000円	1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
- 神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店／〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外務部(メルオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004